

ひとつの事例が地域を変えろ！ 「個」と「地域」の一体的な支援へ

―権利擁護の視点に立った地域のネットワーク形成に向けて

社会的孤立などの新たな生活課題が顕在化する中で、一人ひとりを支える「個別支援」の実践と、個別支援からみえてきた生活課題を地域全体で解決していくための「地域づくり（福祉のまちづくり）支援」とを同時に展開していくことが強く求められています。

本会かながわ権利擁護相談センター（あしすと）では、権利擁護の視点に立った総合的な相談支援ネットワークづくりに向けて、平成25年度の共同募金の配分金により、「個別支援と地域支援を一体的に進めるための事例検討会」研修会・導入編を開催しました。今回の特集では、研修会での事例検討の様子を振り返りながら、「個」と「地域」の一体的な支援の展開について取り上げます。

【事例】 親族や近隣住民とのトラブルを抱えるAさん

70歳代のAさんは、10年前に夫を亡くして以来、一人で暮らしています。Aさんには息子が一人いますが関係が悪く、ここ何年も行き来がありません。また、Aさんは近隣住民ともほとんど交流がありません。

ある日、Aさんから、近くに住む親戚のBさんに「近所から嫌がらせをされる」と不安を訴える電話がありました。すぐにAさん宅を訪れたBさん。連日、様子を見守りましたが、近隣からの嫌がらせ等もなく、Aさんも落ち着いてきたようでした。そんな矢先、AさんからBさん宅に「Bさんが家の中の物を盗ったのではないか」という非難の電話が頻

繁にかかってくるようになりました。Aさんの訴えは、回数も内容も次第にエスカレートしていき、身に覚えのないBさんの精神的負担は大きくなる一方でした。Aさんにかかわる支援機関はケース会議を開き、Aさんを医療受診につなげましたが、明らかに精神疾患は見つかりません。しばらくして、今度はAさんと近隣住民のCさん・Dさんとの間にトラブルが起こり、支援機関はAさんと近隣住民、双方からの訴えの対応に迫られました。

※個人情報に配慮し、事例の一部を変更して掲載しています

【事例検討】 Aさんの「心の内側」は

Aさんはなぜ、親族や近隣住民に

対して、攻撃的にかかわってしまうのでしょうか。

研修会では、助言者の大阪市立大学大学院教授・岩間伸之さんから、次の投げ掛けがありました。

「Aさんの行為自体の良し悪しではなく、AさんがBさんに対して、どうしてここまで攻撃的な態度をせざるを得なかったのか。Aさんの側」



県内4市（秦野市・大和市・伊勢原市・海老名市）と協働で研修会を4回開催。市町村社協を中心に、個別支援やまちづくりに携わる職員が集まり、事例検討を進めました

から考えてみたい。「病気や障害の影響によるものだから」という理由で終わらせずに、Aさんの心の内側にある思いを考えてみてほしい」

参加者は、Aさんの言葉や態度をヒントに「孤独で寂しいが、他人との距離の取り方が分からない」「他人に弱みを見せられない」「常に人間関係の主導権を握っていたい」など、さまざまな意見を述べ合いました。

「声にならない声」をくみ取る ―権利擁護と対人援助の深い重なり

生活歴などを追いながら、Aさんの言動の背景や理由を捉えると、Aさんには「けんか腰」で相手と対面する人間関係のパターンがあることがみえてきました。こうした関係の取り方では「けんか別れ」を繰り返すことも多くなります。事例検討を進める中で、「AさんはBさんに『ずっとかわってほしい』と思いがながらも、その気持ちを表現する術を持たないために、『盗った』と攻撃的に出てしまうのではないか」という気づきが得られました。

また、岩間さんは「Aさんはこれまで、非常に厳しくも切ないマイナスの関係をつくり上げることで、自分の存在を確認することを繰り返してきた」と、Aさんが抱える「生活のしづらさ」について指摘し、「Aさ

んに本当に必要な支援とは、Aさん自らが、この人間関係のパターンを変えていくことを支えること。時間はかかるが、まずは専門職がAさんにかかわることで、Aさんにプラスの人間関係による安心感を経験してもらおうことが大切」と助言しました。

目の前で困った事態が起きていて、本人や周囲の人々からの訴えが強い場合に、支援者はどうしても、事態の収拾に向けた問題の対処に終始せざるを得なくなることがあります。しかし、「どうして本人はそうせざるを得ないのか」という視点で捉え直してみると、そこにある本人の「声にならない声」に気づきます。

権利擁護とは決して特別なことではなく、こうした「声なき声」をしつかりと受け止めていくことです。

Aさんと地域に 同時並行で働き掛ける

Aさんは、近隣住民との関係も悪化しています。親戚のBさんや近隣住民は、Aさんとのかわりに、大きな影響を受けました。けれども、このことは「人と人とは互いに影響し合う存在である」という当たり前の、しかし人間関係の希薄化に伴って忘れがちな、大事なことを考える機会ともなります。

Aさんの心の内側にある思いについて、専門職と近隣住民が一緒に理

解を深めていき、Aさんへのかかわりを考えていくことで、住民側に生じた変化は、Aさん自身の変化にも必ず影響をもたらします。だからこそ、Aさんの支援と、地域への働き掛けを同時並行で進める必要があります。

岩間さんは「Aさんと地域との相互作用関係の変化を促していくための方法として、Aさんの暮らす地域で、専門職と地域住民が一緒に『事例検討会』を開くことはとても大きな意味を持つ」と力を込めます。

第2、第3の「Aさん」の 支援につなげるために

地域生活のあらゆる場面で、時として、事例のAさんのように、自己表現が苦手に対立的な人間関係に陥りやすい方たちと出会い、その言動に困惑することがあります。

地域で開く事例検討会を通して、



岩間さん(左)の助言を踏まえ、参加者からは「事例検討では、まず本人の思いについての共有をじっくりやっていきたい」「地域支援もひとつのニーズから始まる。ひとつの事例への対応をどう地域とつなげていくかが重要と感じた」といった感想が聞かれました

大和市福田北地域包括支援センター
社会福祉士 中山 毅
(大和市社協 主査)



一人の認知症高齢者が地域を変えた

担当する地域で、5年間にわたり、認知症が進行した一人暮らしの方について、個別支援を行うとともに、もう一方ではかかわってくださっている近隣の方々に対して、認知症の方への接し方や緊急時の対応方法などを一緒に考え、近隣住民による支援の力が強まるように働き掛けてきました。

「近隣の皆さんは、自分の将来をこの方に置き換えて見ているのではないのでしょうか。認知症になっても我が家に住み続けられるかどうか、注目していると思います」

ちょうどこの方への支援に動いているところに、この研修会があり、岩間先生からいただいたアドバイスです。鍵や火の管理のことでは、たびたび近隣を巻き込んだトラブルが生じていましたが、確かに、この方を排除しようとする声はほとんど出ていませんでした。

この方が暮らす地域は、高齢化・単身化が進んでいます。この方の支援を通じて、近隣住民自身が介護保険制度や認知症について具体的に学ぶ機会になったと同時に、高まった地域の支援力は他の事例へも生かされていくと、強く感じた瞬間でした。

「ひとつの事例」には 地域を変える力がある

少子高齢社会の急速な進行や生活

Aさんへのかかわりについて意見交換を重ねる中で、「ところで、地域にはAさんのような人がほかにもいるのではないか」と目を向けていくことが、地域の中で同じように、生活のしづらさを抱えている第2、第3のAさんの存在への気づきや支援につながっていきます。こうして最も身近な暮らしの場である「小地域」で地域のニーズを共有していくことが、さらに広い地域での支え合いの仕組みづくりの原動力となっていく

問題が多様化・複雑化していく中で、専門職と地域住民の協働による「地域での支え合い」があらためて重視されています。

「ひとつの事例が地域を変える」という基本的視点に立ち、地域で一人ひとりのニーズをしっかりと受け止めていくことと、地域での支え合いの仕組みづくりを一体的に進めていくことが求められます。

本会では、本年度も引き続き、共同募金の配分を受け、「個と地域の一体的支援に向けたケースカンファレンス(事例検討会)の運営のためのハンドブック」の発行と、研修会の開催を予定しています。

(かながわ権利擁護相談センター)